

はじめに

雑木林の中の朽ちかけた神社の裏手に、ごろんとヒトの頭ほどの大きさの石が転がっている。石を見ていたら、石の中に何かがあるのを感じた。何も見えないし、何も聞こえない、匂いもしない、だけど何かある。



対象：丹倉神社

敷地は海外旅行客も多く利用する京阪電車 祇園四条駅出入口を選択した。現代ではその町に行くにはどの駅に行けばいいかを調べることは当たり前となっている。この当たり前を、一手加えることで豊かな日常に変え、生活に埋没した駅に磐座のような象徴性を持たせられると考えた。なんといっても、この駅のフォルムが石のようで可愛らしかった。

敷地：祇園四条駅出入口



解説

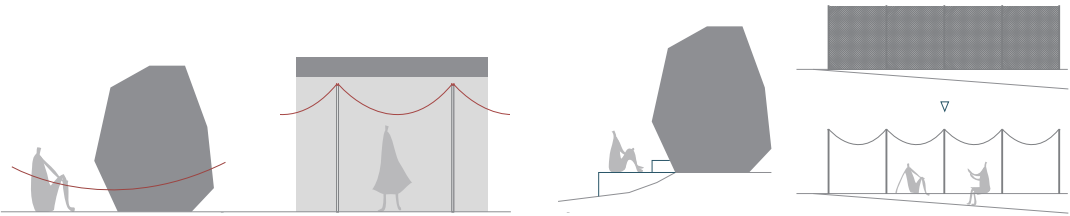
何かとも呼べない途方もなく大きなもの、いや信じられぬほど小さいもの、いや大きさも重さもないもの、訳のわからんもの。

縄の結界
包み込む



鎖の包み

祈りの場 / 敷地と融合した居場所



再構築

石はなんの変哲もないただの石だ。地質学上の学名はあるのだろうが知らない。訳の分からんものを感じたら、笑いだすしかない、あるいは泣きだすしかない。訳の分からんままに、祈れるヒトもいるだろう、訳の分からんものなんかすぐ忘れてしまうヒトもいるだろう。

